

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】(小学校用)

都道府県名	長野県
-------	-----

学校の概要(平成15年4月現在)

学校名	小諸市立 美南ガ丘小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	4	4	4	3	4	3	4	26	41
児童数	128	128	132	117	150	112	17	784	

研究の概要

1. 研究主題

<p>自らを表現し、追究を深める子どもへの支援のあり方 ～書くことを通して自らの考えをまとめることに視点を当てて～</p>

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

<p>事例検討会 ・全学年全学級で累積した事例を基に、子どもの書くことの実態を検討するとともに書くことの指導法、評価の仕方等を検討するため。</p> <p>全校授業研究会 ・3年生・算数 多様な考え方ができる教科、学年であるため。 ・3年生・人権同和教育 書く活動をどのように位置付け、どのように自らを振り返ったらよいかを実証するため。 ・4年生・国語 学校として、当該教科に関する研究実績があるため。</p> <p>一般公開授業(佐久地区教育課程研究協議会会場校として) ・5年生・理科 理科学習における書く活動がどのように授業展開の中に位置付いているのかを広く意見交換するため。</p>

(2) 年次ごとの計画

平成15年度	<p>テーマ 自らを表現し、追究を深める子どもへの支援のあり方 ～書くことを通して自らの考えをまとめることに視点を当てて～</p> <p>研究の見通し 「書く活動を位置付けた学習を展開することにより、自分の考えが持て、主体的な学習ができるようになるのではないか」との指導仮説のもと、書く内容についての研究(教科性、素材・題材・教材研究の観点から)を重ねることにより、指導力向上及び授業改善がなされるのではないかと。</p> <p>研究の内容(方法) ・本校児童の学力実態の把握(日々の授業の様子から、学力検査の実施) ・書く活動を位置付けた学習指導のあり方(授業研究会、事例検討会)</p>
--------	---

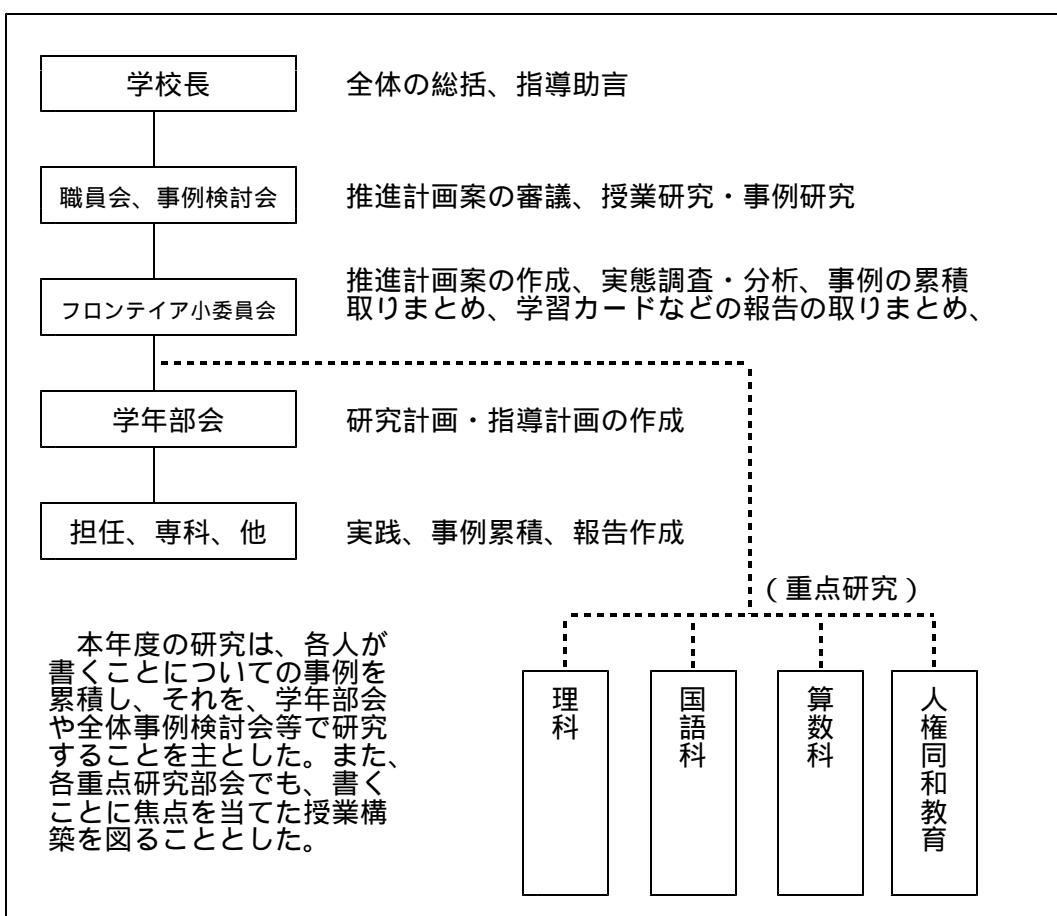
平成16年度	<p>テーマ (15年度より継続)</p> <p>研究の見通し 「書いたもの(学習カードなど)を、自己評価及び相互評価し、それをもとに書いたものを再構成するなどの学習活動を通して、子どもは「進んで自分の学習カードなどを工夫してまとめるようになる」の指導仮説のもと、指導方法の研究(ポートフォリオ評価の考え方の研究、ポートフォリオ評価</p>
--------	--

を生かした学習指導の研究、教材研究等)を重ねることにより、教師が、子どもの書いたものの価値を再認識し、書かれたものを的確に評価できるようになるのではないか。その結果、指導支援を通して、自分の考えを進んで表現し、追究を深める子どもが育成できるのではないかと。

研究の内容(方法)

- ・書くことへの抵抗感を無くす指導(書くことを励みとする子をめざし)(日々の実践;読み、書き、計算の反復練習、校内展示等)
- ・ポートフォリオ評価を生かした学習指導のあり方(授業研究会、事例検討会等)

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

本年度は、実態把握と書く活動の位置付けをどのように行っていたらよいかを、職員一人一人がそれぞれにテーマを持って取り組んだ。

まず、6月に実施した国語・算数の学力検査(CR-T、CD-T)からは、「話す・聞く」及び「書く」領域で課題を持つことが分かった。また、算数では、「知識理解」に課題を持つことが分かった。

また、日々の授業や生活を振り返ってみたとき、物事を自分のこととして捉え関わっていきこうとする意欲及び態度が十分に育っていないことが浮き彫りになってきた。

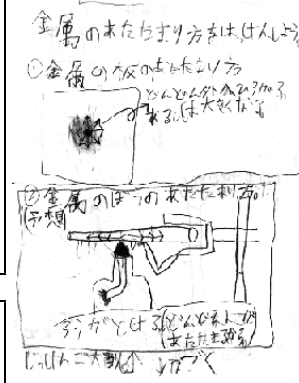
そこで、書くことを授業も含めた子どもたちの生活全般の中で位置付け、書くことを通して自己を見つめ、主体的な学びを展開する子どもを育成することが真の学力向上につながるものと考えた。そして、実践を持ち寄り、事例研究を行う中で、書くことの有効性が見えてきた。

(事例報告；4年理科「物のあたたまり方」)

予想や実験結果を書くことができない。理科の授業だけでなく他の教科でも書くことができない(6月)

(本児への支援)
書く時間を保障
個別に何を書くかを指導
・まず板書を参考にテーマを書く
・図を描く
・考えを図や言葉で書く
書いたことを励ます
全体に本児のよさを紹介する

実験結果や予想を図を効果的に入れて書けている。(12月)



(個の変容) 年度当初から学習カードをほとんど書こうとしなかった本児が、12月には自分から学習カードを書こうとするようになった。

(本年度の成果として)

- 書く活動を位置付けることにより個に応じたきめ細かな指導が可能になる。
- 書く時間は、個に応じた指導評価の時間である。
- ・まず、書けていない子のところに行き、支援できた。
- ・机間指導中に学習カードに朱を入れていくと、発表に生かせたり、考えを深めたりすることができた。
- ・書いた中から、さらに深めたい部分に矢印を付けて書き加えるように促し、考えを深めることができた。
- 書けない子には、その子なりの支援が必要になる。
- ・書き方の一つの型を提示し、それに沿って書くことで自信を持って自分の考えをまとめることができた。(社会科)
- ・思いや考えはあるが文章化できない子が、教師との対話の中で考えをまとめる手掛かりをつかみ、自分の考えや思いを表現できた。
- ・スモールステップ(言葉探し 言葉のスケッチをする 目に見えるものを書く 思ったことを書くなど)で段階的に指導すると、書けるようになった。
- 書かれたものに朱を入れて評価したり、子どもをつまずきを探り、今後の手立てを明確にすることにより、個の追究の深まりが期待できる。
- ・学習カードをもとに、座席表に前時までの到達状況をまとめることにより、次時の活動の予想や手立てが見えてきた。
- ・書けたことを認めることにより、書くことに意欲を持てる子がでてきた。
- 子どもが進んで書きたくなる状況
- ・話し合い活動を通して、書きたい内容が明確になったとき
- ・友の表現のよさに触れたとき
- ・自分の書いたものがよい評価を得たとき(使用漢字数が指定された日記などでも、友や教師から賞賛されると、使用漢字が増えるばかりでなく、内容も充実してくる。)
- ・書くことへの抵抗感が無くなったとき(ドリル的な練習を苦も無くできるようになると、板書を写したり友の考えのよさや教師の話をもメモするようになる。)

2. 今後の課題

本年は、実態把握と書く活動の有効性を探る1年だった。その中から、書く活動は、自己を見つめるのに有効であり、書く時間の確保は、個別指導の時間の確保につながるという利点のあることが分かってきた。また、書いたものを基に評価したり、次時の手立てを検討したりすることも個に応じた指導に役立つことが分かってきた。

しかしながら、子どもの書いたものをどう評価し、どう指導に役立てたらよいのか、戸惑う場面も少なからずあるのも現状である。また、子どもたちは、「書かされている」という意識も無きにしも非ずである。

今後の課題としては、「書かすにはいられない子ども」「子どもの書いたものを的確に評価できる教師」が挙げられよう。

学力等把握のための学校としての取組

1. 調査の名称
標準学力検査 (CR-T)
観点別学力到達度診断検査 (CD-T)
2. 調査の目的
全学年の学力実態をつかむため
3. 実施時期
平成15年6月、予定；平成16年6月、平成16年12月

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

基礎研究として、学習カードの有効性といった成果の一端を、平成15年10月1日の佐久地区教育課程研究協議会の実証授業を通し検証し、普及に努めた。

来年度の普及に当たっては、11月下旬をめぐりに公開研究会を開催する予定である。また、ホームページでの研究の概略、日々の実践の様子等の紹介も検討中である。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 6学級以下 7～12学級
 13～18学級 19～24学級
 25学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
 一部教科担任制 その他
- 【研究教科】 国語 社会 算数 理科
 生活 音楽 図画工作 家庭
 体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無